

看護学生が老人施設での血圧測定を通して得た学び

キーワード：看護学生、血圧測定、コミュニケーション、高齢者

○菅原真優美¹⁾、犬飼美智代¹⁾、小山聡子¹⁾、瀬倉幸子¹⁾、罇淳子¹⁾
新潟青陵大学¹⁾

I 目的

X大学では看護学生が老人施設（老人憩の家P荘）において、学生のコミュニケーション力および血圧測定技術向上をはかることを目的に血圧測定をおこなう事業を平成25年から開始した。今回、体験を通じた学生の学びを明らかにすることを目的として質問紙調査を実施した。

II 方法

1. 対象：X大学看護学科2年生でP荘での血圧測定に参加した学生28人。2. 研究期間：平成27年8月。3. P荘の概要：X大学は大学に隣接する老人憩の家P荘の指定管理者の指定を受け、管理業務を行っている。平成26年度の1日平均利用者数は76人で利用者の平均年齢は75歳である。利用者はサークル活動、入浴、談話、昼寝など自由に過ごしている。4. 学生の血圧測定方法：事前に学生に対してP荘の概要を説明し、希望者を募った。1グループ3～4人で構成し、平成27年5月～7月までの間に一人2回参加できるように日程調整した。訪問時間は午後12時30分～13時30分の1時間である。学生には自分から利用者に声をかけ、血圧測定をするように促した。毎回教員が一人同行し、学生の求めに応じてアドバイスを行った。5. 調査項目・分析方法：調査は質問紙で行った。調査した項目は「高齢者との同居経験の有無」、「事前の血圧測定実施回数」、P荘での行動について選択式で回答してもらい、 χ^2 検定、ウイルクソクソン検定を行い、有意水準は $p < 0.05$ をもって有意差ありとした。他にP荘へ行く前後の高齢者のイメージを自由回答してもらい、1意味単位を抽出し、コード化、意味内容の類似性に従って集合体を形成し、サブカテゴリー化した。6. 倫理的配慮：以下を口頭と文面で研究対象者に説明した。①本研究は単位認定や成績評価とは関係しない。②参加は自由意思であり、途中辞退が可能。途中辞退、参加および不参加による不利益は生じない。③研究結果の公表時のデータの匿名性。

III 結果

対象者28人から回答を得た。

1. 高齢者と接する機会の有無：対象者28人のうち、高齢者と同居した経験のある学生は13人(46.4%)で、普段高齢者と接する機会は「あまりない」と回答した学生が最も多く11人(39.3%)だった。

2. 1回目と2回目の行動の変化：今回1回目と2回目のP荘訪問での行動を比較した全項目、「自分から声をかける」、「自信をもった血圧測定」、「血圧測定実施前・中・後の観察」および「利用者との会話」に

おいて有意差を認めた。

3. 事前の血圧測定の練習回数と行動の関係：P荘で血圧測定した人数は学生ひとりにつき平均で4.1回/人である。P荘に行く前の血圧測定の練習人数では3～5人と回答した学生が14人(50%)で最も多かった。この練習回数と2.に挙げた行動との間に有意差はなかった。

4. 高齢者のイメージの変化：P荘訪問前の高齢者のイメージは抽象的なものが多く、中には否定的（怖い、話が合わない、気むずかしい）なものもあった。訪問後はより具体的イメージ（知識がある、笑顔が多い、元気で多趣味など）が多くなり、否定的イメージは肯定的なイメージへと変化した。

IV 考察

今回学生は、P荘での2回の血圧測定を通して自分から利用者に声をかけ、会話ができるようになり、積極的な行動への変化がみられた。その理由として、1回目の訪問ではふだん高齢者と関わる機会の少ない学生にとって高齢者のイメージが抽象的ではっきりせず、自らの行動をシミュレーションしにくかったのではないかと考える。したがって、1回目の訪問から高齢者に自分から声をかけることは難易度が高い課題であった。しかし、2回目は1回目を得た高齢者のイメージに基づいて積極的に行動できていた。そのため、学生のコミュニケーション力や主体性を形成するには複数回の訪問が必要である。また、事前の練習回数よりも、実際に高齢者の血圧を測ることで血圧測定に対する自信を深め、対象者の観察をする余裕をもたらしていると考えられる。

1回目の訪問前に高齢者に対する否定的なイメージが挙げられた要因として、高齢者と接する機会の少ない学生にとって予期不安が高かったと推測される。また、そのことが学生の行動範囲を狭めたり、緊張を高め積極的に動くことを阻んでいると考えられる。

事前の血圧測定の練習回数とP荘での行動との間に関連は見られなかった。したがって、自らが高齢者と実際に関わる体験によって、高齢者に対する理解を深め、肯定的イメージを形成しているといえる。そのことが学生の積極性や自分の行動に対する自信に繋がっていくと推測される。

V 結論

看護学生は老人施設を複数回訪問して血圧測定を行う体験を通して、高齢者に対する具体的、肯定的なイメージを獲得していた。それにより、積極性を身に付けたり、自信を深め、自らの行動を変化させていた。